竜胆アートワークス

2d Illust Collection

Rindou Artworks

Cover Works
3-8

Novels Works
9-222

Other Works
223-250

これまでキルタイムで描かれてきた
竜胆先生の作品をまとめた電子イラスト集！
小説挿絵で描かれたイラストを中心に、
これまでの単行本の表紙や、ピンナップ画像なども含めた
大ボリュームの構成になっています！
また、本編は印刷も可能！（PDFファイルで提供の場合のみ）
お好きなシーンを手元において楽しめます！
※本編では、このテキストは掲載されていません。

丸呑みイキ地獄 モンスターに捕食されたヒロイン達　表紙イラスト
[2013年8月]

戦姫魔導伝アスカ＆シズル　表紙イラスト
［2008年8月］

陵辱の連鎖　表紙イラスト
［2006年11月］

対魔忍アサギ3　淫獄都市の雌忍　口絵イラスト
［2013年10月］©Lilith

対魔忍ユキカゼ　対魔忍魔調教に堕つ　口絵イラスト
［2012年8月］©Lilith

快楽に身震いするアサギは、手つかずだった肛門にもぬらつく存在を感じて叫んだ。
ぎゅぢゅ、ぬぶぶぶぶっっ！
逃げることも抵抗することもできない虜囚の裏門で、触手が回転し始めた。ドリルのように括約筋をこじ開けて、腸内へと侵入してくる。
「うぁ、に、二本同時なんてっ、あぅっ、うぁあぁぁぁっっっ！」
肉の門をごりごりと抉り抜かれ、直腸を無遠慮に掻き回される恥悦に、アサギの理性は大きく揺らいだ。
ぬぶりゅりゅっ……ぎゅむむっっ……
前と後ろに入り込んだ触手同士が、肉越しにぐりぐりとぶつかり合う。膣粘膜と腸壁が太い海綿体で圧延され、イボ突起で揉みしだかれる。乳首やクリトリスに食らいついた触手の甘噛み攻撃も依然続いている。前後の熾烈な快楽の挟み撃ちに、アサギは拘束された四肢を、腹筋と背筋を痙攣させた。
（くっ、ううっ……これしきのことっ、浩くんを、助けるまではっ！）
彼女は犬のように喘ぎながらも、意思力をかき集めて理性を立て直そうとした。だがまだ、未使用のペニス触手は何本も残っているのだ。

凜子は、強烈すぎる乳首快感に呼吸さえまならず、引きつった喘ぎの合間に、口をパクパクと開閉させて、どうにかこうにか酸素を貪る有様だ。

勃起乳首の側面にローションを擦り込み終えた指は、無造作に先端部を捉え、半球形に膨らんだ乳頭先端部を撫で回す。

「ひゅあぁぁ！　先っ、先は……弄るなぁ！　んくふぅぅぅぅ……んあぁぁぁ！」

身悶えしようとする凜子であったが、快感で痺れた身体はプルプルと小刻みに震えるばかりで、乳頭を摘む指を振りほどくこともできない。

ちゅぷ、ちゅぷ、ちゅぷ……ぬちっ……ぬちっ……くちゅ……くちゅ……くちゅ……ちゅぷっ……ちゅむっ……くちゅる。

ローションを追加しつつ、まるで宝玉を磨き上げるかのような丹念さで乳頭先端に媚毒が塗り込まれる。まだ母乳を分泌したことのない乳腺を逆行した媚薬成分は、乙女の膨らみを内部からも侵食し、対魔忍を発情した牝へと造り替えてゆく。

（ダメ、だっ！　乳首……敏感になって……感じすぎる……胸の奥から……来るッ……来て……しまうっ！）

「にょほおぉぉぉぉ！　やらぁぁ、中ッ、中に、いっぱい溜まってるのぉ。らめぇぇ、オマ■コ、弾けちゃうぅぅ〜ッ！」
「どれどれ、どのくらい溜まってるのか、こっちの穴越しに探ってみてやるぜ！」
ローションに濡れてヒクついている可憐なすぼまりに、奴隷商人の太い指が、グリッ！とねじ込まれる。
「ひゃぁうっ！　うぁ……おひりっ！　そこぉお尻の穴あぁぁぁぁ〜ンッ!!」
アヌスへの異物挿入の衝撃で、宙に飛びかけていた理性をわずかに取り戻したゆきかぜは、小振りなヒップを震わせながら叫ぶ。
「言われなくたってわかってるよ！　フヒヒッ、小さなケツマ■コが、オレの指をキュウキュウ締めつけてくるぜ」
言葉責めで少女の羞恥を煽りながら、奴隷商人の指は恥辱に強ばり震える小尻の谷間を探り、アヌスの蕾に指をめり込ませて小刻みに注挿する。
「ふひゃぁぁぁぁ〜ッ！　そっ、そこぉ、おしりの穴は、もう……いっ、いいいいっ！　わかったからぁ、わかったから、もぉ、触りゅなぁぁ！」

「え――あ、あっ……ひぃっ、あっ、やっ……いやぁぁぁっっっ！」

垂れたピーチブロンドの前髪に亀頭が擦れ、透明の滴が糸を引きながら広がり、肌に熱い感触を塗り広げる。もちろんそれだけでなく、フラウソラの手によって肉棒全体に塗りつけられた恥垢が、女神の高い鼻先に、滑らかで染み一つない美しい頬に、そして柔らかく膨らむ瑞々しい唇に、ベタベタと容赦なく密着してくる。

粘土が絡みつくような不快な感触と、生臭さ、青臭さ、汗臭さの混じる濃厚な牡の臭気が顔中を覆い尽くす。その汚辱感に、フラウソラは確信する。

（や、やっぱりっ……いやっっ、こんなのいやぁぁっっ！）

生殖に必要な、なくてはならない器官だということはわかる。それでも、こんな不潔な、汚塊にしか思えないものを顔に擦りつけられては、ひたすら嫌悪感だけが溢れだす。

「やっ、めなっ……あぶっ、んぅっ……くぁっ、ひっ……いやぁっ！」

「おいおい、なに抵抗してやがる。口で世話しやすいよう、先に慣らしてやってんだ……ほれ、じっくりとこの臭いを吸い込んで覚えるんだぜ。腹の奥まで、たっぷり吸い込めば……くくく、どうだ。だんだんと、甘くなってきただろうが」

「んぶっ、ふぁっ、あやぁぁっ……んぐぅぅっ、そ、そんら、わけがぁ……んくっ……」

（はふっ、んじゅっ、ぐじゅるぅぅぅ……はひゃっ、くぅぅ……ぅんっ……っっ!?）

喉奥を突くくらい肉棒を咥え込み、勢いよく引き上げる。そうして肉傘に唇が引っかかった瞬間、頬を窄めて亀頭を強烈に吸い上げると――。

「おぐぅぅっっ……んっっ、んふぅっ、ふぐぅぅぅんんっっっ!!」

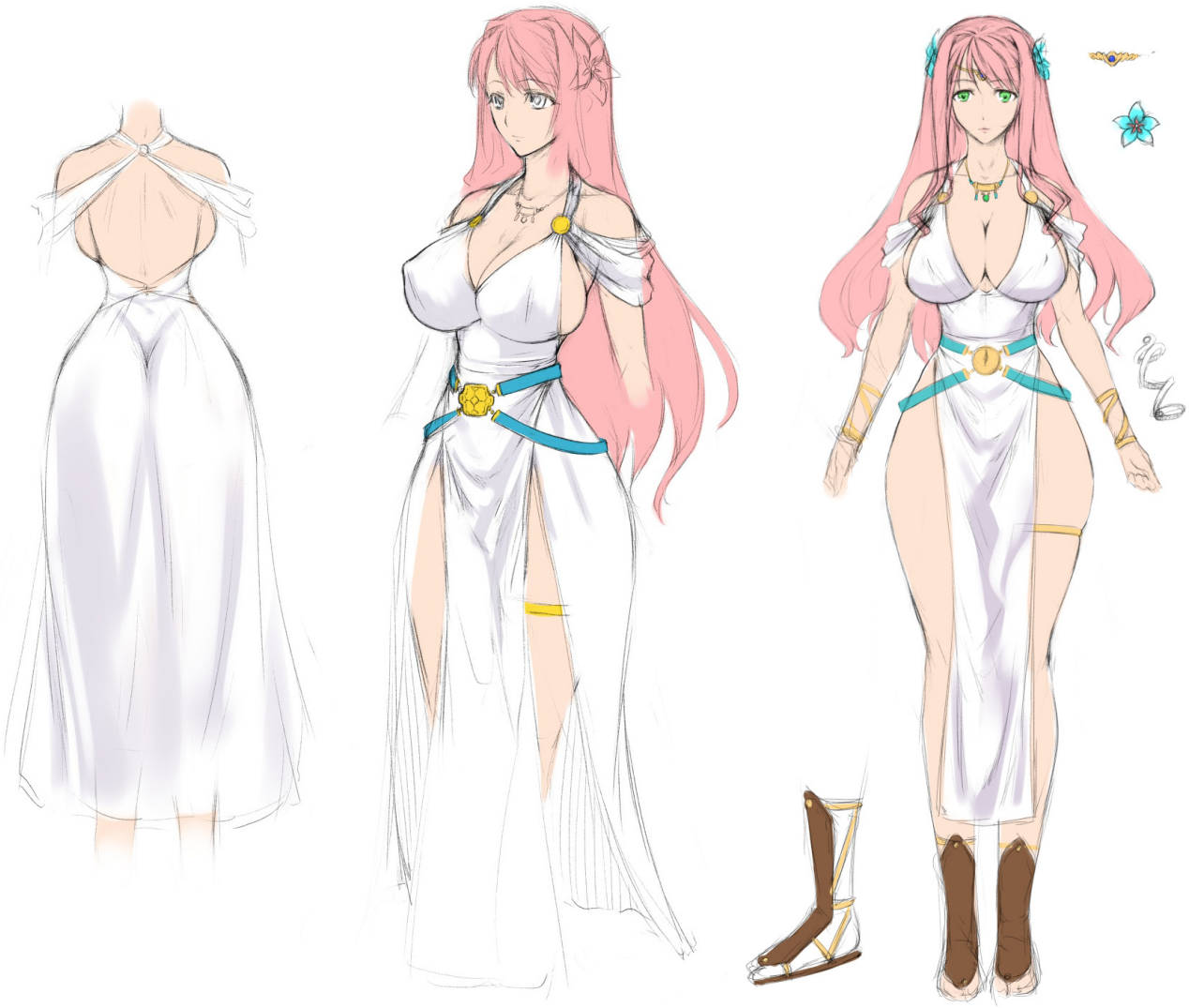
――ビュクビュクビュクゥゥゥ〜〜〜〜ッッ！　ビクッ、ビクビクッ、ドビュルッ！

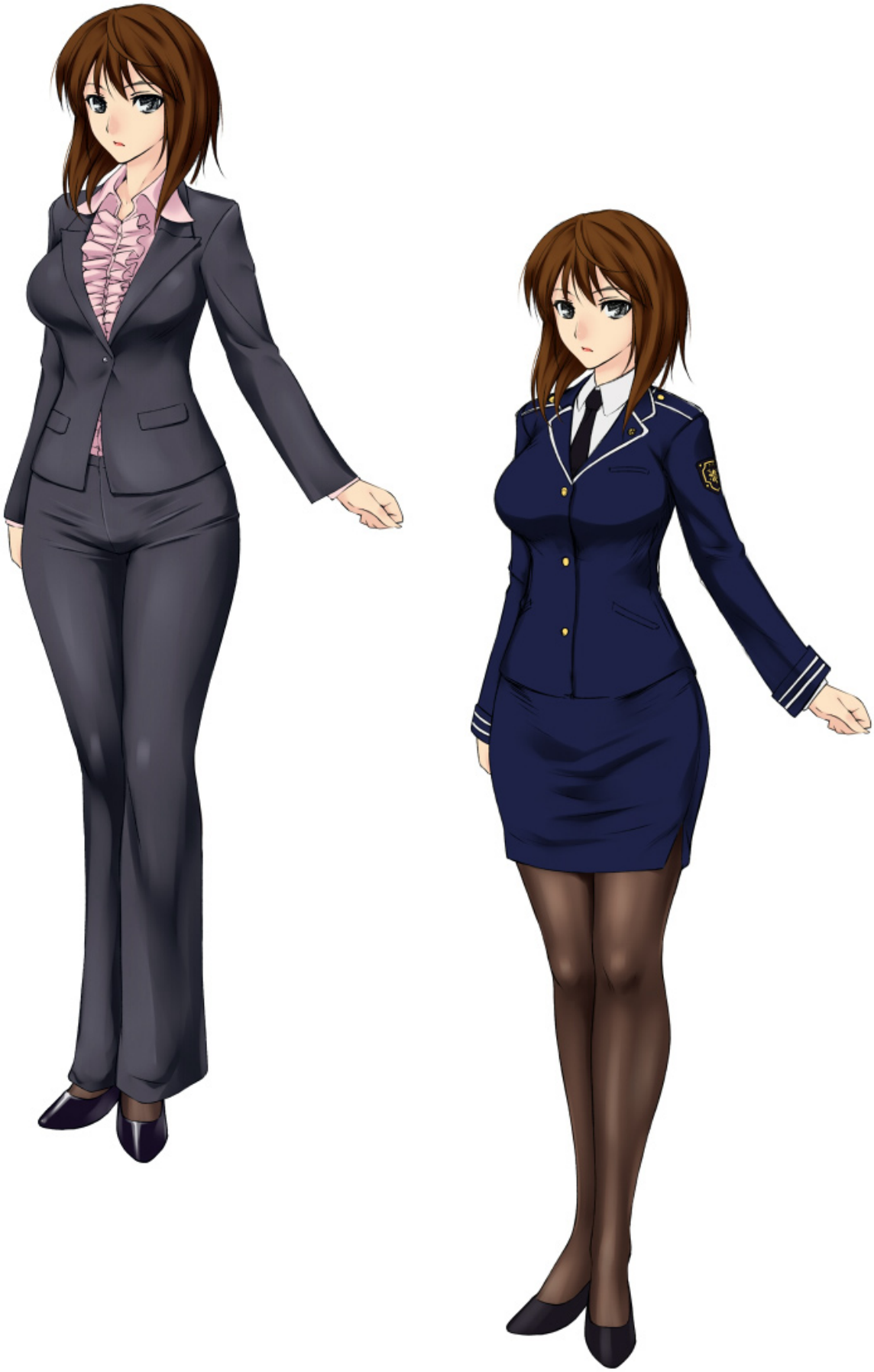
男の亀頭が口内で弾け、脈打つ肉幹が井戸水を汲み上げるように白濁を運び、唾液塗れで異臭に満ちた女神の口内へぶちまける。

（ふはぅぅぅぅんっっ!!　んれっ、れたっ、出ましたぁっ……んくっ、ごくっ、んっじゅるるるっっ……こきゅっ、ぺろっ、れろぉぉっ……んぅぅぅんっっ！）

肉棒の先端が口を開き、絶え間なく溢れる熱牡液が舌上にドロリと広がった。ペニスが弾けるたびに口内へ、そして蕩けた粘膜へ浴びせかけられる。吸い上げるたびに肉棒の熱い脈動は繰り返され、その迸りは際限なく口を叩き、灼き焦がしてゆく。

（ふふぁぅぅぅ……んっ、んぁっ、あみゅぅぅ……んっ、あ、あまぁい……）





女捜査官催眠調教　痴女に変えられた私　キャラクターデザイン
[2011年10月]

初めての手コキ奉仕に没入すれば、掌に広がる未知の性感に肩先から首筋までがうち震え、気を確かに保とうとすれば、突起に与えられている快感が脳天まで駆け上がって来て、咄嗟に力を入れた掌へまたペニスの脈動を感じてしまう。逃げ場のない性感の螺旋階段を女捜査官は追われるようにして上り続けるしかない。

「ふふッ、血行がまたよくなってきたな……クリちゃんに自分のマン汁塗り塗りされて、興奮しているのか？」

「んハァッ、余計な事っ、言わなくていい……の……ぉ、ンンッ！」

おぼつかないながらも肉棒を愛撫し、空いた方の手の指を前歯で噛んだ。上半身と下半身をグルグルと巡る快感電流さえ途絶えてくれれば、無様な姿を男に見せる事はもうないはず、と、綾香は男の手慣れたクリ責めに堪えようとする。

（感じちゃダメッ、これは、そ、捜査ッ、なんだから……ぁ……ハァ……ンッ!?）

真珠色の門歯が、グッ、と指に食い込んだ。

（ンンッ!?　ンフゥッ……ンッ!?　お豆ッ、潰れ……ッ!?）

はち切れそうに膨れたクリトリスを指で思いっきり擦り潰され、そして捻り上げられる。

「ひあああああああああッ!?」
膣に埋め込まれたバイブとクリトリスを責めるバイブ、そして、その二本の間に押し込まれたローターが、一斉に激しく震え、綾香の身体は股間を持ち上げるように大きく弾む。
「すごいッ！　バイブッ、お腹の奥まで響くッ！　壊れちゃうッ!!」
ビクビクと跳ねる下半身に負けじと、乳首を拘束された乳房も思い思いの向きにブルンブルンと揺れながら初めての乳首責めに喜悦のダンスを踊る。
「おぉッ、おっぱいもッ、はぅッ！　こんなにされちゃうなんて……ッ」
仰け反り、頭を振り、まるでトランス状態に陥ったかのような女隊長。

（あぁ、許せないッ！　こんな卑猥な道具でッ、女の子達を責めるなんて……ッ！）
両手の指で必死に押さえ込んでいるバイブのそれぞれの頭同士がぶつかり合い、愛液を攪拌して白く泡立てている。白い泡は指ばかりでなく、手首にも、パンストにもビチャビチャと飛び散り、牝の発情臭を撒き散らしていく。
「もうッ、もうダメぇ！　我慢できないッ！　イっちゃうッ……またイっちゃうッ!!」
四肢が快感でズタズタにされていく。

ズブズブズブ……ゥ……！

精液ローションのぬめりが、少年の初めてをあっさりと呑み込んだ。まさにその姿は、少年の童貞を奪う痴女そのものだった。

「はぅンッ！　ほらッ、犯して……ッ、お姉さんのココ、痴女のオマ■コなのッ！　だから、ンはぁッ、いっぱい犯していいのよ……！」

女性上位のスタイルで、綾香は腰を前後に動かし始める。こうすると子宮口に亀頭が当たり、なおかつ肥大したクリトリスも刺激されるという事を、身体はもう覚えているのだ。

（細いけど、すごく硬くて……ッ、はンッ！いつもと違う所が刺激されてるッ！）

「んぁッ！　ケイスケ君ッ、キミのオチ■ポがッ、お姉さんの子宮の入口、グリグリしてるの、分かる……ッ!?」

「ンンッ、ハァ……ッ！　これがッ、あッ、オマ■コの中……ッ!?」

身悶えしながらそれでも本能のなせる技か、少年は腰を突き上げ始める。

ズチュッ！　ヌチュッ！　ズチュッ！　ヌチュチュ……ッ！

「あはン！　イイのぉッ！　童貞オチ■ポでッ……あぁッ！　オマ■コ犯されてるッ！」

痴女と少年は互いの性器をこれでもかと引き付け合って、律動を一つにする。

魔戦姫 紗夜　淫辱の闘宴　キャラクターデザイン
［2010年10月］

ステンレスの器具に無理矢理こじ開けられている美少女の口腔に、容赦なく溜まり続ける白濁液。いやらしくぬめり輝く白い粘液に舌の紅さが隠れ、埋もれ、頬の内側粘膜や健康的な歯茎、艶やかな皓歯も、おぞましい粘液に沈む。さらに溜まり、なおも溜まって、閉じられない唇の端からついに溢れ出しそうになり――。

「……うぶぇっ！　えぁ……げほっ！　おぶっ！」

いきなり紗夜が咳き込んだ。口の中でずっしり重くなった精液の一部が、舌の隙間から喉へ、強引に潜り込んできたのだ。

美少女の口腔を満たしていた白濁液の半分ほどは、激しい咳に飛ばされて唇の外へこぼれ、頬や顎、鼻や瞼などに青白いダマとなって粘ついたが――。

――ドロリ。

開いた喉へ、残った半分が流れ落ちてくる。

（ああダメ、イヤ……呑みたく、ないっ！）

「もうパワーは充分じゃ。撃てばコロニーは、ほぼ全壊。中の連中は数分かけて窒息死じゃなぁ……ふっひひひ」

「――あぐふぅぅっ…ヒっちゃらめへっ、なんらはあぁぁっ――んぶうぅぅぅっ！」

男が笑いながら操作をすると、女体は、より苛烈な責めに晒される。腸内と子宮と口内を犯すペニスの振動が強まり、更に回転まで し始めた。

――ヂゅびゅリゅビゅびュヂュビゅっ、づュみュミゅうぅぅぅっ！

「んぎっぎっ…ぎひいいぃぃっ――おひっおひっ、ァソコふっ――あぷんぐっばひひいいっ――やめへっやめへくれやめへくれへひいぃあああああぁぁぁっ！」

もうどこが感じているのか解らない。肉体は壮絶な性感責めを甘受する事しかできない。

意識の奥底では、絶体絶命に追い詰められた仲間たちの命を意識する。しかしソレさえもが、無意識な追い詰められ感となって、肉体を性の高みへと導いてしまう。

目の前が白一色に包まれて、熱い全身がスゥっと冷える感覚。

（イヤっ――ィくのイヤっ、ヒヤひやぁっ――ィヤらあああぁぁぁ…っ！）

目隠しされて身を横たえたまま、白濁にまみれた少女がかすかにうめく。
「……ぁ……あ……！」
「聞こえんなあ。そんな小さい声じゃあ。くっくっく……」
男たちの足が優美な四肢を踏みにじる。それにすら快楽の喘ぎを上げる少女。ピンピンに尖ったままの乳首を、膨らみきった肉真珠を乱暴に擦りたてられて泣き叫ぶ。
「イイッ、イイのっ！　欲しいっ欲しいのおお――っ」
ドバドバドバアアッ！　濃厚な白濁ゼリーがしぶきとなって舞い散る。男たちが獄中生活で溜め込んだゼリー状の濃厚なスペルマが金色の少女の髪を、胸を、腹を汚していく。
淫欲に燃える女体はもはや衝動に逆らうことはできなかった。
「ああっっ……もっと、もっとくださいっ――熱くて、濃い精液っ――あはあああんっ」
「はっははは。いくらでもぶっかけてやるぜ、マゾメス暗殺者さんよおっ」
男たちの嘲笑を浴びながら敗北の、屈服の甘い快感に心を焼かれていく。濃厚な性臭の満ちる薄暗い牢獄に映える白い肌。熱い、あまりに熱い白濁液を浴びながら妖虫たちが身体の奥で嬉しそうにうごめいていた。

（み、見られているんだ……。私は生徒会長なんだ、しっかりしないといけないんだ）

ぐっと拳を握る。負けられない。あんな男なんかには負けてられない――！

「――、失礼しました。学園内での携帯での使用についてなのですが、原則として連絡用のみとしての範囲で許可することにします。それから、っ……」

持ち直したと思った。その矢先。

清楚なショーツの裏側に潜んだもう一つのローター。それが遂に、動いた。

ブブブブブブブブブブブブブ！

「――――！　――――！」

たまらずに演台に顔を伏せる。そうしなければ今、自分がどんな情けない表情を浮かべているのかもわからなかった。

（ふあああああっ！　ひあああああぁ！）

狂乱が身体を襲う、それは凄まじい衝撃だった。びりびりと敏感すぎる秘豆を責める痺れが一瞬で子宮を燃え上がらせる。背骨を稲妻が駆け上がり、頭蓋の内側を白熱させた。なおも震える桃色の責め具に、弾き出される意識を必死で掻き集める。

（あ、ひぃっ！　こんなにっ、激しい……なん、てぇっ！　は、うううっ！）

「や……？　はっ……うぅぁ！　んっひぃ！　は、はげし、ひっ!!」

床に転がった肢体がグンとえび反りに持ち上がる。スーツ内部の触手が、凄まじい勢いでのたうっていた。ミミズ腫れのように浮かび上がる触手が乳房をぐるぐると簀巻（すま）きにしていく。触手ペニスがぞわわわっと肌の上を走り、腕から背中、そして恥丘まで伸びていく。

「ひっ、ひぃいっ！　むね、がぁ……！　ひあ……っ！　あ……あああっ!!」

巻きついた触手に絞られ限界まで引っぱられた乳房が放されるのと、スーツ内の触手すべてが蠕動を開始するのは同時だった。触手が全身を這いずり回る。あまりの勢いの激しさに、ぐちゅぐちゅした粘音が大きく響き渡っていた。

「ああひゃうっ！　きは……っ！　あうっ……やめてぇ、はうううっ！」

乳房や恥丘、拘束された手足はもちろん、腋の下や尻肉、太腿から足の先に至るまでを触手が擦りまくっている。もこもこと盛り上がる動きの速さがその激しさを物語っている。

「こすれっ……うぐ……ん！　ひゃふうう！　そ、そこっ、こすれちゃう……っ!!」

レイチェルの瑞々しい肢体が、床の上を大きく跳ね躍った。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/